

幸いと禍いの壺の寓話

—プラトーン『国家』第2巻379dにおける『イーリアス』の引用について

佐野好則

I

『国家』第2巻では、守護者たちの教育に用いられるべき詩の内容が検討される。神は人間にとってよい事々のみの原因として語られるべきとする議論の中で、ゼウスの館の床にある幸いの壺と禍いの壺の寓話が引用される。

Οὐκ ἄρα, ἦν δ' ἐγώ, ἀποδεκτέον οὔτε Ὀμήρου οὔτ' ἄλλου
ποιητοῦ ταύτην τὴν ἀμαρτίαν περὶ τοὺς θεοὺς ἀνοήτως d
ἀμαρτάνοντος καὶ λέγοντος ὡς δοιοὶ πίθοι

κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει
κηρῶν ἔμπλειοι, ὁ μὲν ἐσθλῶν, αὐτὰρ ὁ δειλῶν·

καὶ ᾧ μὲν ἂν μείξας ὁ Ζεὺς δῶ ἀμφοτέρων, 5

ἄλλοτε μὲν τε κακῶ ὅ γε κύρεται, ἄλλοτε δ' ἐσθλῶ·

ᾧ δ' ἂν μή, ἀλλ' ἄκρατα τὰ ἕτερα,

τὸν δὲ κακῆ βούβρωστις ἐπὶ χθόνα διὰν ἐλαύνει· (Resp. 379c-d)

ここで引用されているのは、『イーリアス』第24巻でアキレウスがプリアモスに語る科白である。

δοιοὶ γάρ τε πίθοι κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει
δώρων οἷα δίδωσι, κακῶν, ἕτερος δὲ ἐάων.
ᾧ μὲν κ' ἀμμίξας δῶη Ζεὺς τερπικέρανος,
ἄλλοτε μὲν τε κακῶ ὅ γε κύρεται. ἄλλοτε δ' ἐσθλῶ·
ᾧ δὲ κε τῶν λυγρῶν δῶη, λωβητὸν ἔθηκεν.
καὶ ἐ κακῆ βούβρωστις ἐπὶ χθόνα διὰν ἐλαύνει,
φοιτᾷ δ' οὔτε θεοῖσι τετιμένους οὔτε βροτοῖσιν. (Il. 24. 527-533)

『国家』のテキストにおいて、韻律に従った引用詩句は379d3-4 (527-8行), d6 (530行), d8 (532行)である。これらの引用詩句のうち、d4と528行が大きく異なっていることが目立つ。

κηρῶν ἔμπλειοι, ὁ μὲν ἐσθλῶν, αὐτὰρ ὁ δειλῶν (Resp. 379d4)
δώρων οἷα δίδωσι, κακῶν, ἕτερος δὲ ἐάων (Il. 24. 528)

幸いと禍いの寓話は、プラトーン以後の作家たちによってもしばしば引用された。

その際に、『イーリアス』の詩句からの引用もあるが、むしろ『国家』から引用される場合が多くなる。⁽¹⁾『国家』にみられる形での詩句はそれ以前の文献には見当たらない。

『国家』第2巻における幸いと禍いの壺の寓話の詩句の一部が『イーリアス』第24巻のテキストと異なっている理由については様々な推測がなされている。『イーリアス』の詩句のあやふやな記憶に基づいて誤った詩句を伝えた、あるいは我々の知っている『イーリアス』のテキストとは別の詩句がプラトーン以前からあり、それを忠実に引用した⁽²⁾、または意図的に『イーリアス』の詩句に変更を加えた⁽³⁾、という可能性が考えられうる。

本論考においては、この寓話についての古代以来の解釈上の争点を概観した(II節、III節)後、『イーリアス』第24巻におけるこの寓話の詩句と『国家』におけるその引用の相違を詳細に検討することとしたい(IV節)。そのことを通して『国家』第2巻において引用された壺の寓話の詩句が、『イーリアス』第24巻のテキストと異なったものとなった背景について、再検討することを試みたい。

II

『イーリアス』第24巻の幸いと禍いの壺の寓話については、古代以来解釈が分かれていたことが古註より窺われる。

καὶ ὅτι δύο τοὺς πάντας λέγει πίθους· τινὲς δὲ τῶν νεωτέρων ἓνα μὲν τῶν ἀγαθῶν, δύο δὲ τῶν κακῶν ἐδέξαντο. (Schol. A ad *Il.* 24. 527-8)

そして全部で二つの壺を(ホメーロスは)述べていること。しかし、より新しい者たちのうちのある者たちは、幸いの壺一つと、禍いの壺二つであると解釈した。

この古註記者は壺の数が二つであるという見解をとりつつ、三つであるとする解釈の存在に言及している。そして、現代の研究者の間でも、壺が二つであるか三つであるかについては見解が分かれている。⁽⁴⁾

壺は全部で二つとする見解の場合、528行後半の κακῶν, ἕτερος δὲ ἐάων は ὁ μὲν κακῶν, ἕτερος δὲ ἐάων (「ひとつは悪しき(賜物)の、他方はよき(賜物)の」)の代わりであり、527-8行の δοιοὶ . . . πίθοι . . . δώρων (「賜物の二つの壺」)の言い換えとみなされる。このように ὁ μὲν が省略される類例として『イーリアス』第22

(1) Westの校訂本の testimonia を参照。例えばプルータルコスはこの寓話に何度も言及し、*Consol. ad Apoll.* 105c においては『イーリアス』の詩句を引用するが、*De Aud. Poet.* 24a-b および *De Exilio* 600c-d においては『国家』の詩句を引用する。Cf. Robbins 1990, p. 314, n. 32.

(2) Adam 1963, ad 379d はこの見解をとる。

(3) Van der Valk 1964, 316-318.

(4) Ameis-Hentze 1922, ad *Il.* 24. 528; Leaf 1902, ad *Il.* 24. 527; Willcock 1984, ad *Il.* 24. 528; Macleod 1982, ad *Il.* 24. 527-33; Richardson 1993, ad *Il.* 24. 527-33 らは壺を二つとする。それに対して Adam 1963, ad *Resp.* 379d; Young 1963, p. 51 (with note 2) らは三つとする。

巻でアキレウスがヘクトールを追走する次の箇所が挙げられる。⁽⁵⁾

τῆ ῥα παραδραμέτην, φεύγων, ὁ δ' ὀπισθε διώκων (Il. 22. 157)

そこで二人は走った、(一方は)逃げつつ、他方は後ろから追いつつ。

ここでは φεύγων は続く ὁ δ' ὀπισθε διώκων と対比されて、ὁ μὲν φεύγων の意味合いになっている。他方、壺の数を三つとする見解の場合、528 行の κακῶν は直接 δώρων を修飾し、δώρων . . . κακῶν のみが 527 行の δοιοὶ . . . πίθοι を限定し(「悪しき賜物の二つの壺」、ἕτερος δὲ ἑάων は「そしてよき(賜物)の他の(壺)」を意味するとみなされる。

次の古註は二つの見解の違いについて具体的に指摘する。

καὶ ὅτι τὸ ἕτερος ἐπὶ δύο. ἕως δὲ τοῦ δίδωσι βούλονται στίζειν ἵνα μὴ δύο πίθοι ὦσι κακῶν καὶ εἷς ἀγαθῶν, ὥσπερ καὶ ὁ Πίνδαρος ἐξεδέξατο·

(Schol. A ad Il. 24. 528)

そして ἕτερος という語は二つのものについて(用いられる)こと。また人々は δίδωσι のところまでで区切ることを望むが、それは、ピンダロスも解釈したように、禍いの壺二つと幸いの壺一つがあることにならないためである。

この古註では、まず ἕτερος という語が三つ以上のものではなく二つのものについてのみ用いられるという見解が述べられている。しかし、この指摘は正確ではなく、実際には ἕτερος が三つ(三項目)以上のものについて用いられる例はある。⁽⁶⁾

次に古註記者は句読法(punctuation)を取り上げる。528 行の δίδωσι の後に点をつける(στίζειν)というのは、壺を全部で二つとする見解の場合に κακῶν が δώρων を直接修飾しないことと関連する指摘である。さらに古註記者はピンダロスが壺の数を三つとする見解を持っていたとするが、この点については次節で検討する。

Leaf は最終的には壺が全部で二つとする見解をとるが、三つとする見解は後続する叙述とよく適合するという利点があるとし、次のように述べる。

(I)f there are two jars of evil to one of good, we see how it is that a man can at best expect only a mixture of good and ill, and may have no good at all.⁽⁷⁾

Leaf のこのコメントを Adam は壺を三つとする自説の補強とする。⁽⁸⁾ 後続する叙述とは、529 行から 533 行における禍いと幸いを与えられる者と、禍いのみを与えられる者への言及のことである。いずれの者にもゼウスが二つの壺から混ぜて与えたとした場合には、禍いの壺が二つと幸いの壺が一つであると、禍いと幸いを受ける者と、禍いのみを受ける者が生じることと適合する。つまり、二つの禍いの壺を<禍い 1>、<禍い 2> とし、幸いの壺を<幸い>とするなら、禍いと幸いを受ける場合は<禍い 1> と<幸い>の組み合わせと、<禍い 2> と<幸い>の組み合わせとなり、禍いのみを受ける場合は<禍い 1> と<禍い 2> の組み合わせとなる。そして幸いの

(5) Cf. K.-G. II, 265-6.

(6) Cf. LSJ, s. v. “ἕτερος” II. E. g. *Od.* 7. 123-6.

(7) Leaf 1902, ad *Il.* 24. 527.

(8) Adam 1963, ad *Resp.* 379d.

壺は一つしかないので、幸いのみを受ける者はいないこととなる。それに対して壺が全部で二つという見解の場合には、禍いのみを受ける者は、二つの壺の中身を混ぜたものを受けるのではなく、禍いの壺一つの中身を受けることとなる。『イーリアス』第24巻の原文では、禍いと幸いの両方を受ける者についての529行には *ἀμμείξας* があるが、禍いのみを受けるものについての531行には二つの壺の中身を混ぜたことを表す表現はない。壺が三つであると解釈する場合には、531行でも *ἀμμείξας* が了解されているとみなすことになる。

『イーリアス』第24巻の幸いと禍いの壺の寓話の叙述からは、壺の数が全部で二つであったとも三つであったとも解釈しうる。いずれの解釈をとるかについての重要なポイントのひとつは、528行の *ἕτερος* が527行の *δοιοὶ πίθοι* のうちの一つを指しているのか、それとも三つ目の *πίθος* を指しているのかということである。もうひとつの重要なポイントは、531行に *ἀμμείξας* が了解されているとみなすか否かである。

III

先に引用した『イーリアス』の古註に、ピンダロスがこの寓話の壺を三つと解釈していたとされていたが、この記述は『ピューティア祝勝歌』第3歌の次の一節に基づく。

εἰ δὲ λόγων συνέμεν κορυφάν, Ἴέρων,
ὀρθὰν ἐπίστα, μανθάνων οἴσθα προτέρων
ἐν παρ' ἐσλὸν πῆματα σύνδυο δαίονται βροτοῖς
ἀθάνατοι. (Pyth. 3. 80-2)

だがもし言葉のまっすぐな極みを、ヒエロンよ、理解することができるなら、あなたは先人たちから学んで知っている、一つのよいことと並べて不死の者らは合わせて二つの苦難を人間どもに分け与える、と。

この箇所への古注には次のように記されている。

ὁ μέντοι Πίνδαρος οὕτως ἐδέξατο, δύο πίθους εἶναι φαύλων καὶ ἓνα ἀγαθῶν . . . οὐκ ἔστι δὲ τοῦτο. δύο γὰρ οἱ πίθοι εἰσι, καὶ ὁ μὲν εἰς ἀγαθῶν, ὁ δὲ ἕτερος φαύλων, τὸ γὰρ ἕτερος ἐλέγχει παρακείμενον. ὅπερ ἐπὶ δυικοῦ μόνου ἀριθμοῦ λέγεται, τῶν δύο τὸ ἕτερον. (Schol. BDEGQ ad Pyth. 3. 81)

他方ピンダロスは次のように解釈した、悪い事々の二つの壺と、よい事々の一つの壺があると。・・・しかしそれは正しくない。すなわち、壺は二つであり、よい事々の一つの壺と悪い事々の一つの壺である。なぜなら、*ἕτερος* という語が当該の解釈を反駁する。この語は二つの数のことについてのみ、「二つのうちの一方のもの (*ἕτερον*)」と述べられる。

この古注記者は、一つのよいことと並べて二つの苦難を神々が人間に与えるという『ピューティア祝勝歌』第3歌の詩句の内容が、幸いの壺一つに対して禍いの壺が二つあるとする解釈の反映であるとみなしている。そしてこの解釈を斥け、その根拠として『イーリアス』の古注でも言及されていた *ἕτερος* の用法が指摘される。

『ピューティア祝勝歌』第3歌には壺への言及がないため、引用した80-82行のみからは、『イーリアス』第24巻の寓話の叙述との類似性は顕著ではない。ピンダロスがこの箇所述べていることは、神々から与えられる禍いと幸いの比率が二対一ということであり、ゼウスのもとにある壺の数のことを述べているのではない。しかし、文脈も考慮すると両者の間には注目すべき共通点がある。⁽⁹⁾『ピューティア祝勝歌』第3歌の引用箇所の格言的表現も、『イーリアス』第24巻の寓話も、慰めのために用いられ、神話上の二人の人物に適用されている。『イーリアス』第24巻ではプリアモスを慰めるためにアキレウスは、ペーレウスとプリアモスが寓話のように幸いと禍いの両方を受けたことを述べる。『ピューティア祝勝歌』第3歌では、ヒエロンを慰めるために、格言的表現はペーレウスとカドモスに適用される。さらに、ペーレウスが寓話ないし格言的表現を適用される人物となっていることも、両作品の共通点である。しかも、ペーレウスの幸いとして女神テティスとの結婚 (*Il.* 24. 537 / *Pyth.* 3. 92) が挙げられ、禍いとしてひとり息子のアキレウスが若くして戦死すること (*Il.* 24. 540-542 / *Pyth.* 3. 100-103) が挙げられていることも共通する。以上の共通点および、*μανθάνων οἴσθα προτέρων* (*Pyth.* 3. 80) という表現に注目すれば、『ピューティア祝勝歌』第3歌81-82行は、『イーリアス』第24巻の壺の寓話を思い起こさせるものとみなすことができる。ピンダロスが『イーリアス』第24巻の寓話における壺の数について自らの見解をこの詩句によって表明したとは言い切れないが、少なくともピンダロスの詩句は、『イーリアス』の寓話における壺の数の解釈についての関心を高める効果を持ったことは大いに考えられる。

IV

『国家』379dで引用される詩句を『イーリアス』第24巻の壺の寓話の詩句と詳細に比較検討したい。まず第一に注目すべき点は、*Resp.* 379d2-3である。『イーリアス』第24巻527行は

δοιοὶ γάρ τε πίθοι κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει

となっている。この詩行は『国家』においては次のように引用される。

..... λέγοντος ὡς δοιοὶ πίθοι

κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει

γάρ は、『イーリアス』第24巻ではゼウスの壺の寓話全体が直前の2行(525-6)で述べられる内容⁽¹⁰⁾への説明となっていることを示す小辞である。『国家』において *λέγοντος ὡς* に続く構文の中で *γάρ* の意味は失われる。*δοιοὶ πίθοι* については『国家』の写本間に読みの相違がある。A写本とD写本においては *δοιοὶ πίθοι* であるが、F写本においては *δοιοὶ τε πίθοι* となっている。前者の読みは Chambry, Adam, Slings によって採用され、後者の読みは Burnett, Murray によって採用されている。F写本に従って *δοιοὶ τε πίθοι* とすると *ὡς δοιοὶ τε πίθοι κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει*

(9) Cf. Robbins 1990, pp. 313-5; Sotiriou 1998, pp. 109-111.

(10) ὡς γὰρ ἐπεκλώσαντο θεοὶ δειλοῖσι βροτοῖσιν,
ζῶειν ἀχνημένους· αὐτοὶ δὲ τ' ἀκηδέες εἰσίν. (*Il.* 24. 525f.)

がちょうど dactylic hexameter の一行となるため Burnett と Murray はテキストを以下のように行分けする。

..... λέγοντος
 ὡς δοιοί τε πίθοι κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει

このようにすると ὡς が引用の中に入ることになる。しかし、ὡς は λέγοντος に続いて直接引用を導く接続詞であるため、一行前の λέγοντος と並べるべきである。⁽¹¹⁾ 従って F 写本に従う場合にはテキストの行分けを以下のようにすべきであろう。

..... λέγοντος ὡς
 δοιοί τε πίθοι κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει

しかし、F 写本には小辞を追加したり削除したりする顕著な傾向がある。⁽¹²⁾ このことを考慮に入れると、δοιοί πίθοι の部分を韻律に合わせるために F 写本で(『イーリアス』の 527 行にある) τε が挿入されたことの方が、A 写本と D 写本において韻律が合わなくなるにもかかわらず τε が抜け落ちたことよりも蓋然性が高いと思われる。

もしそうであれば、韻律に合わない δοιοί πίθοι が ὡς の後に、そして韻律に合う κατακείαται 以下の引用詩句の前に置かれていることになる。おそらくそのことを意識して AD 写本に従う Adam と Slings は、379d2-3 のテキストを以下のように δοιοί πίθοι の部分を隔字体 (Sperrdruck) にしている。

..... λέγοντος ὡς δοιοὶ πίθοι
 κατακείαται ἐν Διὸς οὔδει

δοιοί πίθοι は κατακείαται の主語ではあるが、韻律に従っていないため κατακείαται 以下とは一定の距離が置かれることとなる。⁽¹³⁾

『国家』379d4 は『イーリアス』第 24 巻 528 行と大きく異なっている。

δώρων οἷα δίδωσι, κακῶν, ἕτερος δὲ ἐάων (Il. 24. 528)
 κηρῶν ἐμπλειοι, ὁ μὲν ἐσθλῶν, αὐτὰρ ὁ δειλῶν (Resp. 379d4)

『イーリアス』の詩行においては II 節で述べたようにこの行の後半の曖昧さから、壺の数に関する異なる見解が生じた。それに対して『国家』の引用詩行においては、ὁ μὲν ..., αὐτὰρ ... という言い回しが用いられるために、幸いの壺が一つ、禍いの壺が一つであることが明確になる。

Van der Valk は「よい」を意味する形容詞と「悪い」を意味する形容詞が『イー

(11) 380a3 の ὅτι や 381d1 の ὡς は同様の接続詞であり、明らかに引用されている詩句の外に置かれている。

(12) “F is very careless in the addition and omission of particles, articles, pronouns, prepositions, etc.” (Boter 1989, p. 106f.); “In a number of places, the text of F exhibits interpolation and conjectures. . . . often, one or two words have been added in order to clarify the construction of a sentence, especially forms of εἶναι and φάναι.” (Ibid. p. 109) さらに Slings の校訂本における F 写本の一般的な扱われ方については納富 2006, p. 110f. 参照。

(13) Chambry は F 写本の τε を省略するが、δοιοί のみを ὡς に続けたところで改行し、πίθοι から韻律に従った引用となるようにテキストを組んでいる。この場合、δοιοί のみが πίθοι κατακείαται 以下から離れることとなる。

リアス』と『国家』では逆の順番になっていることに注目した。そして、神々から生じることはよい事々のみとする『国家』第2巻の文脈に合わせて、『イーリアス』とは逆に「よい」を表す語が先に置かれたと考える。⁽¹⁴⁾ただし、379d6においては、「悪い」を意味する形容詞(κακῶ)が「よい」を意味する形容詞(ἐσθλῶ)より先に置かれる『イーリアス』の詩句(II. 24. 530)がそのまま引用されており、「よい」を意味する形容詞を先にすることは一貫しているわけではない。

この詩行の行頭において、『イーリアス』で用いられた δῶρων が『国家』では κηρῶν に変わっていることも注目すべきである。κηρ という語は、「死、死に方、最期、破滅」を意味し、神格化された場合には「死、破滅の女神」(e.g. II. 18. 535)となる。⁽¹⁵⁾それに対して『国家』379d4においてこの語はよいまたは悪い「運、めぐり合わせ」の意味合いで用いられている。このような語義はホメロス叙事詩におけるこの語の用法としては考え難い。Murray はここでの κηρ の用法の参考例として、πίθος と κηρ がともに用いられるヘーシオドス『仕事と日々』の以下の箇所を挙げる。⁽¹⁶⁾

πρὶν μὲν γὰρ ζῶεσκον ἐπὶ χθονὶ φύλ' ἀνθρώπων
νόσφιν ἄτερ τε κακῶν καὶ ἄτερ χαλεποῖο πόνοιο
νούσων τ' ἀργαλέων αἶ τ' ἀνδράσι κήρας ἔδωκαν·
ἀλλὰ γυνή χειρεσσι πίθου μέγα πῶμ' ἀφελούσα
ἐσκέδασ· ἀνθρώποισι δ' ἐμήσατο κήδεα λυγρά. (Hes. Op. 90-92, 94-5)

しかしここでの κήρας は明らかに「死、最期」の意味である。むしろ『国家』379d4における κηρ の例外的な語義の背景としては、二つの κηρ が並べて言及されるいくつかの箇所が参考になると思われる。『イーリアス』第8巻と第22巻には、ゼウスが取り出す天秤に二人の戦士の κηρ を載せる同一の描写が見いだされる。

καὶ τότε δὴ χρύσεια πατήρ ἐτίταινε τάλαντα
ἐν δ' ἐτίθει δύο κήρε ταηλεγέος θανάτοιο (II. 8. 69f. = II. 22. 209f.)

さらに『イーリアス』第9巻でアキレウスは自分の κηρ について次のように語る。

μήτηρ γὰρ τέ μέ φησι θεὰ Θέτις ἀργυρόπεζα
διχθαδίας κήρας φερέμεν θανάτοιο τέλοσδε, (II. 9. 410f.)

この引用に続いてアキレウスの二つの κηρ の内容が具体的に述べられる。それはトロイアに留まって戦い続ける事によって戦死し不滅の名誉を得るか、あるいは帰国して長生きするが名誉を得ることができない、という選択肢である。ここで κηρ は、この語の他の用例と共通して「死に方、最期」の意味であるとともに、一般的な「運命、めぐり合わせ」という意味にも近づいている。

次に 379d5 をとりあげる。この行は対応する『イーリアス』の詩行と表現の上で類似するが、韻律に従っていないパラフレーズである。つまり詩の引用ではなく、ソークラテースの科白の地の文である。

(14) Van der Valk 1964, pp. 316-8.

(15) Cf. *Lfgre*, s. v. “κήρ” (Th. Vlachodimitris); Chantraine, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, s. v. “κήρ”.

(16) Murray 1995, ad *Resp.* 379d3-8.

καὶ ᾧ μὲν ἄν μείξας ὁ Ζεὺς δῶ ἀμφοτέρων (Resp. 379d5)
 ᾧ μὲν κ' ἀμμείξας δῶη Ζεὺς τεραπικέρανος (Il. 24. 529)

このパラフレーズにおいては、『イーリアス』にある小辞 κ(ε) がアッティカ方言形の ἄν に、また『イーリアス』にある接続法の動詞 δῶη もそのアッティカ方言形 δῶ に変えられている。ここで注目すべきことは、『イーリアス』にある複合動詞 ἀναμείγνυμι の分詞 ἀμμείξας が『国家』では単純動詞 μείγνυμι の分詞 μείξας となっているが、省略された前綴り ἀμ- が『国家』においては ἄν に転用されたようにみえることである。さらに、『イーリアス』にあるゼウスのエピセツト τεραπικέρανος の代わりに『国家』のパラフレーズには ἀμφοτέρων という語が用いられている。これによりエピセツトという叙事詩に特徴的な文体を地の文に持ち込まないとともに、混ぜられたものが二つの壺の中身であることをより明確にする。

379d5 の ᾧ μὲν は 379d7 の ᾧ δ(έ) と呼応する。その 379d7 の内容は『イーリアス』第 24 巻 531 行の前半に当たるが、言葉遣いは大きく異なる。

ᾧ δ' ἄν μή, ἄλλ' ἄκρατα τὰ ἕτερα (Resp. 379d7)
 ᾧ δέ κε τῶν λυγρῶν δῶη (Il. 24. 531)

『国家』にある μή は『イーリアス』の詩句にはない。『国家』の文脈上、379d5 の分詞 ἀμμείξας がここでも了解され、否定詞 μή はこの了解された分詞を否定することは明らかである。そして、μή に ἄλλ' ἄκρατα が続くことによって「混ぜ合わせることを」の否定が強調される。ここで思い起こすべきことは、これに対応する『イーリアス』第 24 巻 531 行に 529 行と同様の ἀμμείξας という分詞を了解することができるのか否か、内容的に言えば、531 行でゼウスが二つの壺の中身を混ぜ合わせて禍いを人間に与えるのか、それとも二つの壺の中身を混ぜ合わせるのではなく、一つの壺に入っている禍いを与えるのかが曖昧であることが、壺の数についての異なる解釈が可能になる理由の一つであるということである。379d7 の μή, ἄλλ' ἄκρατα という表現はこの曖昧さを払拭するとみなすことができよう。

379d7 においても一つ注目すべき点は、τὰ ἕτερα という表現が用いられていることである。この表現は「(よき事々と悪しき事々のうちの) 一方(悪しき事々)」という意味で用いられている。この表現に用いられているのと同じ ἕτερος という形容詞が『イーリアス』第 24 巻 528 行で用いられていたことを思い起こすべきであろう。その詩行において、ἕτερος が、その前の行の δοιοὶ πίθοι のうちの一方を指すのか、それとも δοιοὶ πίθοι とは別の三つ目の πίθος を指すのかについての曖昧さが、壺の数に関する解釈上の相違につながったことは先に II 節において述べた。その同じ形容詞が 379d7 の散文の地の文の中で用いられていることは全くの偶然ではないかもしれない。

V

以上の検討から、『イーリアス』のテキストと比較して『国家』における壺の寓話の引用にある方向性を見いだすことができるように思われる。

『国家』において引用されている詩句と『イーリアス』の詩句の最も大きく異なる点は 379d4 の引用詩行において、壺の数が全部で二つである事が明瞭となる表

現が用いられた事である。379d4のὤςに続く読みがδοιοὶ πίθοιであるとするなら、ここにも壺の数が全部で二つである事を明確化する効果を見いだすことができる。δοιοὶ πίθοιは、韻律に合わないために続く引用詩句からある程度独立し、いわばこの寓話全体の見出し語のような役割を担うことになるのではないだろうか。

また379d7にも、壺の数の解釈に関わる表現が見いだされる。ここには、壺の数の解釈上のポイントの一つである、禍いのみを受ける人間がゼウスから受けるものは、二つの禍いの壺の中身を混ぜたものなのかどうかに関する曖昧さを強く打ち消す表現(μή, ἀλλ' ἄκρατα)が用いられている。

以上の諸点には、プラトーンが『イーリアス』の寓話における壺の数の解釈上の争点を意識していることが表れていると推測することが可能であるように思われる。⁽¹⁷⁾『イーリアス』や『ピューティア祝勝歌』第三歌の古註で言及されるこの解釈上の問題が、プラトーンの時代に意識されていたことについての証拠はないが、十分考えうることであり得ると思われる。

379d4行の引用詩句冒頭のκηρῶνは例外的な語義において用いられており、伝統的な叙事詩の詩句であったとは考え難い。『イーリアス』において、運命の選択肢を表すものとしてこの語が用いられている箇所を参考にして、この引用詩句が作られたと考えることができよう。

プラトーンが引用詩句に巧みな改変を施したとする推測については、ソクラテースの科白の地の文である379d5で、叙事詩に用いられるの方言形(κε)をアッティカ方言形(κν)に代える際に複合動詞の前綴りを利用するという巧みな改変を『イーリアス』の詩行に加えた痕跡がその傍証となる。

本論考の検討は、『国家』における幸いと禍いの壺の寓話の引用は、壺の数についての曖昧さのない『イーリアス』の別伝の詩句を忠実に伝えたものではなく、壺の数をめぐる争点を意識してプラトーン自身が改変を加えたものという推測に支持を与えるものと思われる。

参考文献

- J. Adam, *The Republic of Plato*, vol. 1, 2nd ed., Cambridge U. P., Cambridge, 1963.
- K. F. Ameis-C. Hentze, *Homers Ilias 2-4: Gesang 22-24* (5te Auflage), Teubner, Leipzig, 1922.
- G. Boter, *The Textual Tradition of Plato's Republic*, Brill, Leiden, 1989.
- A. B. Drachmann, *Scholia Vetera in Pindari Carmina*, Teubner, Leipzig 1910 (repr. Hakkert, Amsterdam, 1964).
- T. Gould, *The Ancient Quarrel between Poetry and Philosophy*, Princeton U. P., Princeton, 1990.
- W. Leaf, *The Iliad*, vol. 2, London, 1902 (repr. Hakkert, Amsterdam, 1960).

(17) 壺の数の解釈上のポイントとなる ἕτερος という形容詞が379d7に用いられているが、このことはプラトーンがこの寓話の解釈におけるこの語の理解の重要性を認識していた事の表れであると考えられるかもしれない。

- C. W. Macleod, *Homer, Iliad, Book XXIV*, Cambridge U. P., Cambridge, 1982.
- P. Murray, *Plato: On Poetry*, Cambridge U.P., Cambridge, 1982.
- 納富信留「プラトン『国家』の新しい校訂版について」『フィロロギカ』1 (2006), 99-119.
- N. Richardson, *The Iliad: A Commentary*, vol. 6, Cambridge U. P., Cambridge, 1993.
- E. Robbins, “The Gifts of the Gods: Pindar’s Third *Pythian*”, *Classical Quarterly* 40 (1990), pp. 307-18.
- M. Sotiriou, *Pindarus Homericus, Homer-Rezeption in Pindars Epinikien (Hypomnemata 119)*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1998.
- M. van der Valk, *Researches on the Text and Scholia of the Iliad*, pt. 2, Brill, Leiden, 1964.
- M. M. Willcock, *The Iliad of Homer*, vol. 2, Macmillan, London, 1984.
- D. C. Young, *Three Odes of Pindar*, Brill, Leiden, 1968.

本稿は平成 17・18・19 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「西洋古典文学における間テキスト解釈理論に基づく実証的作品論研究」(課題番号 17520186) による研究成果報告の一部である。

(国際基督教大学)